

今年で3年目となったMCPHS*大学サマープログラムは、8月3～16日に実施され、2、3年生の男女15名が私を含む引率教員3名（中村誠宏准教授、河下映里助教）と共に参加しました。

本プログラムは、英語力を身につけることはもちろんのこと、「薬学」をキーワードに、現地の教職員や学生との交流を通して、より一層、薬学を学び実践することの喜びを感じられるように組んでいます。

午前是一般英語の授業、午後はアカデミックプログラム（全てMCPHS大学の先生によって英語で行われる）が実施されました。今年度は特に、メディシナルケミストリー、生理学、薬理学、薬物動態学、臨床薬学等の薬学専門科目の講義時間を多く組み込んだプログラムとしました。講義以外には、①Dana Farber Cancer InstituteおよびBrigham and Women's Hospital (at Harvard Medical Area) の薬剤部見学、②St. Vincent Hospital (in Worcester) 見学、③コミュニティーファーマシーの調剤室見学、④コミュニティーファーマシーにてOTC薬について学ぶ、⑤MCPHS大学内模擬薬局にて処方解析および服薬指導実習（MCPHS大学6年生とロールプレイング）、⑥プレゼンテーション2回、⑦MCPHS大学研究室見学、⑧MCPHS大学の教職員・学生との交流会等があり、平日の7日間は英語と薬学漬けの毎日でした。週末には、ボストンの街並みを散策し、ハーバード大学やMIT大学の見学、ボストン美術館やサイエンスミュージアムにも行き、それぞれが様々なことを感じ考えたことと思います。

「薬学」が世界共通であること、英語力およびコミュニケーション力は世界共通の薬学を学び実践する上での必須のツールであることを学ばれた皆さまが、今後この経験を活かし、勉学に励まれることを期待しています。（文責：天ヶ瀬 紀久子）

*Massachusetts College of Pharmacy and Health Sciences（所在地はマサチューセッツ州ボストン市）



修了証が授与されました



MCPHSの学生と服薬指導実習を終えて



ボストン空港にて

うえの ふみたか
■ 3年生 植野 文貴

初めての海外ということで英語が聞き取れるのかな、という不安を抱えながら日本から13時間かかり、たどり着いた場所は本当に魅力的だった。空港に降り立つと日本とは違い湿気が少なく過ごしやすい気候だった。

最初の授業は特に緊張した。MCPHSの先生が聞き取りやすいスピードで話してくれているが、まだアメリカに来たばかりで英語に慣れなくて授業についていくのが大変であった。土日の休みは、ハーバード大学やマサチューセッツ工科大学のキャンパスツアーに参加した。現地の学生による説明の英語のスピードはとても速く、聞き取るのに非常に苦労したが良い経験だった。また、キャンパスは京葉と違いとても広大な土地にいくつもの建物があり、さすがアメリカだなと感じた。また、日本にいるときから楽しみにしていたレッドソックスの試合観戦もすることができた。球場自体も日本のものとは作りが異なっていたり、得点を取ると隣にいた方とハイタッチをしたりとても楽しむことができた。



チャールズリバーをバックに男子3人！（筆者は右）

病院見学や薬局見学では説明して下さる薬剤師の方に積極的に質問をすることで、質問内容以上のことを教えて頂き非常に勉強になった。アメリカの薬剤師の業務内容の多さや、テクニシャンという薬剤師の補佐をする役割の職種があることに驚き、日本での薬剤師の地位よりもはるかに高く評価されているように感じた。それとともに日本の薬剤師はなぜアメリカほど評価されていないのだろうかという疑問に

思った。

授業も終盤に近づくにつれ、毎日の英語の授業のおかげで、少しずつ聞き取れるフレーズが増え、最初の授業の時よりも理解できることが多くなり積極的に発言しようと思うことが多くなった。あつとい

う間に過ぎた2週間は、初めて日本とは異なる文化に触れた刺激的な日々の連続であり、この留学で得た様々な知識と英語力をより一層向上させるためにも、もっと幅広い視野を持って今後の勉学に励みたい。

おかざき さやか
■ 2年次生 岡崎 彩香

私が今回の留学に志願した理由は、日米の医療制度の違いを学びたく、消極的な自分を変えたかったという思いからです。平日は夕方まで授業があり、空き時間や土日は観光名所を巡るというハードスケジュールでしたが、その分得たものは数え切れないほどです。まず私は授業スタイルに刺激を受けました。授業では発言の機会が多くあり、互いの考えを共有します。自分から意見を述べることやミスをすることへの恥ずかしさは一切なくなり、自然と積極的になれた気がします。また毎日の英語の授業は、自分の固定化していた学習方法を見直す良いきっかけとなりました。休日には仲間と買い物に出かけたり、食事をしたり、楽しく過ごせました。フリーダムトレイルを歩いてボストンの街並みと風土を体感できたことも素晴らしい思い出です。

さらに、病院・薬局見学を通して日米の薬剤師や薬局の相違について学びました。日本では薬剤師が調剤や薬歴管理など全ての業務を担いますが、米国では薬剤師が処方監査に従事し、テクニシャンが調剤を行います。米国薬剤師はワクチン接種業務も担うことから、その権限や責任は極めて大きいものだと感じました。1日に扱う処方箋の数が300~400枚と聞き驚きましたが、時短化・効率化を図るための様々な工夫がなされていました。



MCPHSの学生と（筆者は右）

そして米国特有の問題や取り組みで特に印象的だったのは、オピオイドの多用とがん告知についてです。米国では薬物中毒による死亡者が多く、薬物中毒患者

の4分の1は、鎮痛薬として用いるモルヒネ/オピオイド系薬物による中毒だそうです。また、がん告知は必ず行い、その上で慎重に治療法や薬の説明をします。患者の完全な理解を目的とし、世界各国の言語や宗教に対応していると聞きました。

このように実際の現場で学んだこと、肌で感じたことは、今後日本の医療に目を向ける際の新たな視点に繋がると思います。私は是非これらを共有する機会を持ち、薬剤師としての



MCPHSの学生と（筆者中央）

の資質の向上と医療の発展に役立てていきます。

わだ そのみ
■ 2年次生 和田 園生

毎日たくさんの刺激を受け、素晴らしい経験ができた2週間でした。

平日は授業や見学、休日は観光というスケジュールでした。授業をしてくださった先生方は、私達が理解できるようゆっくり話してくださったり、何度も理解が追いついていないかを確認していただいたり、とても親切な方ばかりでした。最初の授業では、私達のほとんどが発言をしなかったのですが、徐々に全員が積極的に発言するようになっていきました。私自身も、いつもの自分なら受け身で聞いているだけになってしまいがちですが、実際に発言をして授業に参加することで先生の問いかけに対して

常に自分の意見を考え、意識するようになっていき、その分授業内容を楽しむことができました。

病院見学、薬局見学では日本とアメリカの薬剤師の違いを目の当たりにしました。様々な違いがありましたが、私が思う二つの大きな違いを例に挙げようと思います。一つ目は、アメリカにはテクニシャンという調剤技師がいるということです。アメリカの病院では一フロアに一人の薬剤師、一つの薬局に一人の薬剤師といったように一人の薬剤師にかかる責任は大きなものとなります。テクニシャンはそんな薬剤師のもとで調剤等の業務の補佐をしていました。二つ目は、アメリカの薬剤師はワクチンの注射ができるということです。患者は薬局でワクチン接種の予約をすれば、薬剤師によるワクチン接種を受

けることができます。現在アメリカで信頼されている職業の第2位が薬剤師であると聞いたことがあったのですが、見学を通して薬剤師の仕事の重要さ、地位の高さを実感し、とても納得できました。

留学を通して、自分から積極的に行動をすることが大切だということを身に染みて感じました。留学に行くという機会があっても、そこで自分が何もしないとなかなか成長することはできないと思います。今回は意識の高いメンバーに恵まれ、更に現地の学生さんや先生方と交流する機会がたくさんあったことで、自分からどんどん行動することができ、成長できたと思います。学んだ知識、姿勢を将来に活かしていけるよう、これからも英語と薬学の勉強に励みたいと思います。

最後に、引率の先生方をはじめ、留学を支えてくださった全ての方々に心から感謝しています。ありがとうございました。



グローバルレセプションでMCPHSの先生方と（筆者中央）

大学コンソーシアム京都主催

「英語で京都をプレゼンテーション」を受講して

Report.

3年次生 太田千佳子

私は昨年度、本学のMCPHS大学サマープログラムを経験し、帰国後も英語力向上や教養のため、目標を持って何か新しいことにチャレンジしたいと考えていました。大学コンソーシアム京都が主催する本講座は、日本の伝統文化を実際に体験でき、他大学の学生とも交流できる点が魅力的で受講を決めました。

全6回(各回3.5時間)の講座では、京都や日本に関するクイズ、宗教や教育等に関して英語で集団討論、茶道・華道・能の体験、プレゼンを行いました。グループプレゼン(20分間)と個人プレゼン(6分間)では、私はそれぞれ「京都における教育」と「祇園」について英語で発表しました。グループプレゼンでは、1位を獲得ことができ、個人プレゼンでもネイティブの留学生から良い評価をいただきました。



イタリア人留学生とのセッション（筆者は中央）

放課後や土日の発表準備は大変でしたし、レベルの高い発表が多くて緊張しましたが、ボストンでの数多くのプレゼン経験を今回活かすことができたと感じています。

受講して得たものは、英語での表現方法だけに留まらず、日本や京都、自分たちの事に関してもっと興味を持ち、自発的に学ぶ姿勢が必要であるということです。一緒に参加していた他大学の学部も年齢も様々な学生は、自分の専門分野だけでなく、英語や他分野の勉強への意識が高く、大変刺激を受けました。私は昨年度の留学経験が本講座の受講に繋がったので、留学経験を一過性のものにせず次に次のステップへの足掛かりにすることも大切だと思いました。

これからは薬学の勉強だけでなく英語力向上にも努め、他国の方々とも自分の表現でコミュニケーションが取れる魅力的な薬剤師になりたいです。



華道体験の様子（筆者は右端）